

---



---

## 学内活動報告

---



---

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 7  
P.49-53 (2019)

# フィンランドの教育の背後にあるもの

## A brief view on the simple strength of Finnish education

山下 巖\*  
YAMASHITA Iwao

### 1. はじめに

昨年11月にフィンランドのユヴァスキュラ応用科学大学(Jyväskylä Ammattikorkeakoulu : Jamk)から4人の先生方を招き、本学部で『次世代型介護を考えるー世界一幸せな国フィンランドからの提言』と題したシンポジウムを開催した。開催にあたり、実際にフィンランドを数度となく訪れ、Jamkの先生方や学生、その関係者の方々と打ち合わせやディスカッションを行う機会を得た。その際、常に感じたことは、教員、学生を問わず、フィンランド人の発想の豊かさ、多様さ、多才さである。その想像力豊かな発想は当然のことながら一朝一夕に身につけることができるものではない。初等教育からの積み重ねの結果、現在の状況を築き上げているのであろう。そこで本稿では、その多様性を根本から培うフィンランドの初等教育について簡単に私見を述べてみたい。

### 2. フィンランドの試練ー教育政策の一大転換

1980年代までフィンランドの主要産業は、紙やパルプを生産する森林業を中心に順調な経済成長を遂げていた。しかし、1990年の旧ソ連の崩壊やバブル経済の失速とともに、その貿易輸出国を失ったフィンランドは、大きな経済危機に見舞われ、失業率も20%

を超す事態に陥った。この危機を乗り切るため、フィンランド政府はそれまでのモノづくり主体の産業から知識集約型のIT分野への研究開発に集中投資を行い、見事に経済復興を遂げたのである。つまり、国内市場だけでなく世界市場を視野に入れ、英語を武器に、ソフトウェア開発や情報、デザイン、通信(インターネット)などの分野において戦略的に付加価値を生み出した。これこそが、フィンランド経済の競争力を支える原点となっているのである。こうした大転換は、産業構造の変革だけでなく、教育政策の理念にも当然ながら大きな変革をもたらすこととなった。

大量生産の時代を支える人材を育成するには、個性や長所を伸ばすよりも欠点の少ない人材を育てることに力点が置かれがちである。自分しか思いつかない個性的なアイデアや創造性を、時間をかけてじっくりと育てゆくよりも、既存の知識や公式を短期間に丸暗記させる注入型の手法が優先される。正解もない問題を時間をかけてあれこれと考え、自分なりの答えを見つけ出す速効性のない手法よりは、いかに手早く効率的に想定された解答へと正確に辿り着けるかが重視される。しかし、現代のような知識集約型社会において、いわゆる「知的財産」を創出してゆくことのできる人材には、創造性や柔軟な発想力が求められるのは言うまでもない。

1994年に、28歳の若さで教育大臣となったオリペッカ・ヘイノネン(Olli-Pekka Heinonen:現在は

---

\* 順天堂大学保健看護学部

\* Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing

(Nov. 9, 2018 原稿受付) (Jan. 18, 2019 原稿受領)

内閣府長官)は、問題解決能力、自律学習力、創造力をフィンランドの未来型教育の3本柱に掲げ、どんな状況にでも対応でき、将来のキャリアチェンジも可能にする人材育成を目指した。その結果、21世紀に入ると、フィンランドは、PISA(OECD主催による国際学習到達度調査)において、世界を驚かせるほどの教育成果を挙げたのである。それまで見向きもされなかったフィンランドが、全世界から衆目を集めるようになったことは記憶に新しい。

ヘイノネンによる教育改革は、同時に教師にも厳しい改革を強いることとなった。政府は検定教科書制度を廃止し、新たな学習指導要領の導入により学習到達度目標のみを設定し、具体的な教育手法や授業内容は地方教育委員会、学校及び個々の教師に委ねられるようになったのである。この一見すると自由度が高まったような大転換ではあったが、教師は従来の指導要領に沿ったいわゆる定食メニューの如き授業から脱する事を余儀なくされ、授業内容とそれに見合った新たな手法を自ら考案・実施するべく、大いなる独創性が求められるようになった。筆者は、2006年に現地小学校を訪問し、英語教員を中心にインタビューを実施したが、いずれの教師もこうした厳しい変化を切り抜けてきただけに、自信に溢れる表情で「それまでになかった可能性を見出した」と回答をしてくれたのが印象であった。

### 3. フィンランドの教育制度

まずはフィンランドの教育制度を俯瞰してみたい。フィンランドでは、わが国と同様、7歳から義務教育が始まり、生徒はほぼ同じ学年進行で9年間就学し、高等学校や職業訓練学校を経て大学へと繋がるシステムとなっている。義務教育は、2006年以前は小学校と中学校それぞれに分かれて実施されていたが、2006年以降、小中一貫の総合学校(comprehensive school)教育へと移行した。

義務教育終了後はほとんどの生徒が中等教育に進む。中等教育は高等学校と職業訓練学校に分かれており、約60%が前者に、約40%が後者に進む。いずれの進路を選択しても高等教育への道は開かれており、生徒は自分に合った進路を選択することが多い。

高等教育は大学と応用科学大学(旧ポリテクニク)において行われる。大学では学術研究に力点が置かれ、修士取得が基本単位となっている。これに対し、応用科学大学では職業に直結した実践的・学際的領域を中心に研究が進められる。学士取得が主目標であるが、さらに研究を継続する場合は大学院に進むこともできる。大学は全国に14校あり、約16万3千人の学生が在籍し、応用科学大学は24校で約13万人が学んでいる(2017年現在)。

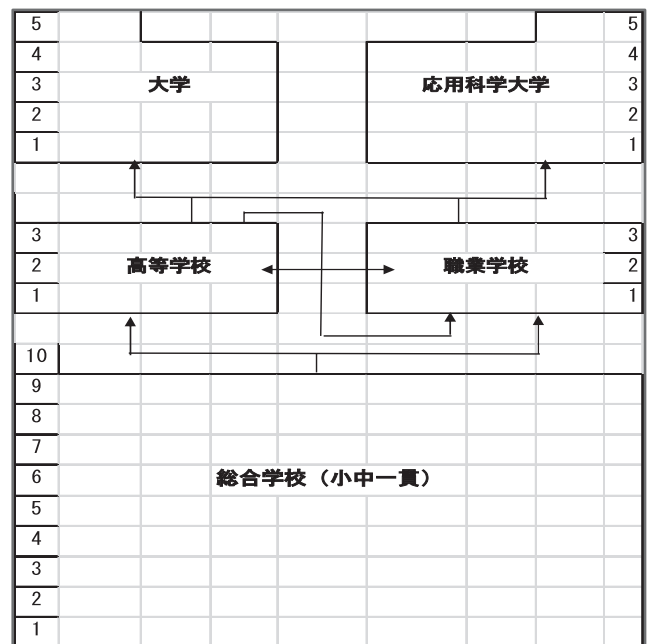


図1 フィンランドの教育制度

### 4. フィンランドの教育の特徴

フィンランドの学力観の根底にあるのは、ヴィゴツキーが提唱した「社会的構成主義(social constructivism)」であるとされる。通常私たちは、学習は個人単位で行われるものであり、その成果は個人的な能力として蓄

積されると考えている。これに対しヴィゴツキーは、学習は人との関わりの中で行われるものと捉え、子どもの精神的発達には社会的なつながりを通して起こると提唱する。したがってフィンランドにおける学習とは、実践的・社会的な目的のために、知識や情報を収集し、それを自分なりに再構築・編成して、社会に発信することであり、主体的な営みでありながらも他人との相互的な関わりに立脚しているのである。

#### 4.1. クロスカリキュラムによる教科間の融合

フィンランドでは、ある一つの物事について、多様な観点から様々な情報を関連付けながら考えることが重視される。そこで、教科・科目間のコラボレーションを可能とするクロス・カリキュラムの導入が図られている。例えば、小学校3年生の算数の教科書には、3桁の足し算において、フィンランドの主要都市の地図とそれらの都市間の道路距離が表で示され、ある都市からある都市を経由して別の都市まで行くのに車で何キロメートル走るかという課題が載っている。単に数字上の計算をするだけでなく、地理の知識と組み合わせにして計算させようとする意図が明確に表れている。さらに、中学生や高校生になると体育と音楽と芸術までも融合させたミュージカルの授業などもある(鈴木2006)。こうした教育は自国や外国の文化背景が巧みに織り込まれたシラバスに沿って、学年進行とともに計画的・段階的に進行してゆくのも大きな特徴となっている。

英語教科書の編成に目を転じてみると、小学校3年生では、疑似体験ではあるが、「体験的異文化理解」が英語教育を通して行われる。架空の異文化世界に身を置きながら、自分の日常生活、自分の好きな物・ことについて簡単な英語で表現することが中心となっている。4年生では、イングランドの小学生との交流を疑似体験しながら、ロンドンを中心に英語圏の文化について学ぶという知的理解が促されている。5年生で

は、同じくイングランドの小学生との交流や学校生活を疑似体験する。そして、対象はイングランドから連合王国に広がり、英国文化を知的・共感的に学ぶための題材が扱われている。さらに、6年生では情報教育とのクロス・カリキュラムにより、インターネットを通してグローバル・リテラシーを高めるよう世界の子供達との英語コミュニケーションの場面が中心である。また、最後の課でフィンランド国民の多様化について、移民や複数文化共存家庭の子供たちを包摂的に扱った内容描写を提示しているところに、フィンランドにおける小学校英語科教育の着地点を見いだした思いである。

## 5. 授業手法

### 5.1. 「なぜ」を追求する学習

フィンランドの総合学校の教室では、“Miksi”(なぜ)の追求に重点を置いた教育方針が徹底していることを、浅間(2016)は指摘している。筆者は、2009年にヘルシンキからバスで1時間ほど北西に行ったヴィヒティ市(Vihti)にあるクオッパヌミ総合学校(Kuoppanummen Koulukeskus)で、『カチカチ山』を英語で読み聞かせをする機会を得た。相手は日本の小学校の4年生に相当する生徒であった。時々、笑いながら話を聴いてくれたが、終了後質問の時間となると、予想どおりMiksiの集中砲火を浴びることとなった。「なぜおばあさんはタヌキの縄を解いたのか」、「なぜウサギが出てくるのか」、「なぜウサギが唐辛子を持っていたのか」、「どこで手に入れたのか」、「沈むとわかっているのにタヌキはなぜ泥の船に乗ったのか」、「タヌキは泳げるはずなのになぜ湖に沈んだのか」、「タヌキとウサギが登場したのは何かわけがあるのか」などなど。

授業後にマルック・トルヴァネン(Markku Tolvanen)校長と話す機会を得た。日本では、質疑応答はたいてい知識の有無や事実の確認になってしまうことが多く、

その場のコンテキストとは離れた内容の質問もされることが時にあるし、また子どもの場合だけではなく、一般社会人の社交場面や研究者の学会場面でも、余りにも頻繁に「なぜ」と聞くと理屈っぽく思われてしまいがちだがフィンランドではどうなのかと、敢えて疑問を投げかけてみた。するとトルヴァネン校長は、フィンランドの教育に特徴的なのは、子どもたちの発言に対して教師が徹底的に Miksi と尋ねることであると答えた。またこれは家庭でも同じで、親と一緒に鑑賞した映画でも、「なぜあの場面が気に入っているのか」と、やはり親は子どもになぜを問いかけるとのことであった。校長によると、読書から得た知識を色々な観点から様々な関連情報と結びつけた上で、思考させてゆくことが大切だと考えているとのことであった。また、なぜ自分がそう答えたのか、あらためて冷静に考え自己分析をすることが重要である、とも答えてくれた。当たり前のことに対して敢えて疑問の眼差しを投げかけてみることにより、新たな発想が生まれ出ることにはよくあることである。フィンランドでは、子どもといえども、発達段階の初期から、社会に対して自発的に関わりを持つことが求められ、常に問題を見つけ出し、解決する方策を考える訓練が繰り返し継続的に行われているようである。こういった環境下で育った子どもたちであるからこそ、社会に対して自発的に関わりを持とうとし、常に独創的で既存の枠を超えた発想を形に変え、社会にとって役に立つ価値を創造してゆくのであろう。まさに Miksi は、その序章と言えそうである。

## 5.2. 情報と知識の違い

先述のインタビューの中で、トルヴァネン校長は、知識を論理的に説明するだけではなく、実生活の中にあるものと結びつけたり、異なる分野の関連する事柄を合わせたりしていくことが重要だと答えた。フィンランドの学校では、教師によって提供された情報が、

必ずしも生徒に正解として認識されるとは限らない。また生徒も正解として受け入れることを求められない。それらは、あくまでも一つの情報として認識され、それらの情報と生徒自身が仕入れた情報とを自ら関連づけ、自分のものにしてゆくことが求められることが多い。フィンランドでは、このようなプロセスを経て生徒が獲得したものを「知識」と捉えている。そして教師は、生徒が得た知識が論理的に妥当であれば、たとえ常識から逸脱し、間違っていると思われることでも、否定しない傾向がある。生徒の論理的思考力を促すことにより、論理的に妥当な解決法を生徒自身に考えさせる。「では一体、評価はどのようになるのか？」とつい思ってしまう。次項では、その評価法について述べたい。

## 5.3. 成績評価と大学入試について

個々の授業の中での評価はどうであろうか。フィンランドの学校では、学習内容に関する理解度を問うようなテストが授業の中で行われることは稀であり、日本の通知票のようなものもないと聞く。筆者はフィンランド人教師に「なぜないのか」と問うてみたことがあった。その答えは「平均点が2.7になった生徒と3.6になった生徒の間にある0.9の違いは何を意味するのか理解できない」というものであった。通信簿は1990年以前のヘイノネン改革時代にはあったが、現在は廃止されてしまっているとのことであった。

一方で、全国から100校を抽出して実施される学力調査があるが、この目的は、生徒の学習意欲の推進というよりはむしろ、国家的な教育の全国的な統一ガイドライン作成や教育方針や質の評価である。この全国学力調査では、正式な試験を受ける1時間ほど前に、生徒にその試験内容に関する解説と問題が記載された冊子が手渡される。生徒は1時間かけてその冊子を読み、お昼休みの1時間をはさんで実際の試験を受ける。試験内容は、知識や記憶力を問うのではな



く、論理的思考力を問う試験である。この全国調査結果は、受験した各学校にフィードバックされ、運営改善に活用される。

上述のように、義務教育終了段階までは生徒間の競争をモチベーションとした教育は行われていない。しかし、大学入試となると様相は大きく変化する。大学へ行くには、例年、春期・秋期の2シーズンにそれぞれ3週間にわたって実施される大学入学検定試験を受験しなくてはならない。3週間とはいえ一日おきに実施され、受験生はせいぜい1～2科目を選んで受験する。連続する3シーズンの間に4科目の試験に合格しなくてはならない。当然のことながら、短答式やマークシート方式の解答ではなく論文形式の試験で、自分の考えを客観的に展開できることが求められる。試験時間は1科目6時間(午前9時から午後3時)にも及ぶもので、受験生は各自の判断で試験時間中に休憩や昼食も取ることになっている。サンドイッチを片手に問題に取り組む受験生あり、生のニンジンバリバリと音を立ててかじりながら答案作成をする生徒ありといった具合である。試験成績は7段階に分かれる。この成績をもとに、各大学の個別入学試験を受験しその合計点で合否が判定されることが多い。中には、この検定試験のみで合否が決まるケースもある。

## 6. おわりに

フィンランドの学校と聞くと、「競争がない」、「学力格差がない」、「自律学習中心」、「教師はサポート役に徹する」といった言葉がすぐに思い浮かぶ。しかし、上述のように我が国とは異なった「知識」の捉え方や概念の上に指導要領が策定され、カリキュラムが組まれている。

日本におけるフィンランド型教育への注目は高まっている。アメリカやイギリスなどに目を向けることが多かった日本が、フィンランドに視線を向けるのは確かにこれまでのアメリカ・イギリス重視を相対化する

意味では有効かもしれない。しかし、重要なのは単なるシステムの移植ではなく、背景にある社会的・歴史的な文脈を考慮することである。

## 引用文献

浅間正通「デジタルとの対話」『デジタル時代のクオリティライフー新たに見つめるアナログ力』浅間正通編著, 遊行社, pp.16-43, 2016年.

鈴木誠『初等中等教育と高等教育が接続した新しい科学カリキュラムとその指導方法の開発』, 平成15~17年度科学研究費補助金, 基盤研究(B), 課題番号:1530257, 研究成果報告書, 2006年.